

# 河川漁撈研究の課題―研究史と研究課題―

伊藤 廣之

**要旨** 民俗学の代表的な生業研究を振り返り、「人の生」との関わりから生業のあり方を追究することが現在の生業研究の課題であることを指摘した。そのうえで、戦前・戦後の河川漁撈研究を検討し、漁具・漁法を中心とした漁撈活動の実態的な研究から脱却し、川漁師の川・魚・自然に対する世界観や生活の総体を捉えようとする研究が立ち上がりつつあることを指摘した。それを踏まえて、河川漁撈を「人の生」の営みとして捉え、川漁師の生計・生活・人生などとの関わりを分析することが、今後の研究課題であることを論じた。

## はじめに

環境問題の深刻化を背景に、人文・社会科学の分野において自然や環境に関する研究がさかんとなり、一九八〇年代以降、民俗学においても自然や環境を射程に入れた研究が見られるようになった。一九九〇年代には学会の研究動向を語るうえで、自然や環境に関する研究は大きなウエイトを占めるようになっていく。

生業研究の一分野をなす河川漁撈の研究においては、一九六〇年代後半以降、河川環境の悪化にともなう伝統的な漁具・漁法の消滅の危機感を背景とし、漁撈具や漁撈習俗を対象とした調査研究がおこなわれるようにな

った。一九七〇年代以降は、最上川・荒川・利根川・多摩川・九頭竜川・江の川などで、文化財調査の一環として漁撈習俗調査や漁撈具の収集がおこなわれるようになり、一九九〇年代には民俗学研究者による河川漁撈や川と人の関わりに焦点を当てた研究書が刊行されるなど、この分野の研究成果は着実に積み上げられてきたと言える。

本論文では、第二次大戦前から近年までの民俗学を中心にした河川漁撈の研究史を振り返り、これまでの研究の到達点を明らかにするとともに、河川漁撈研究の今後の研究課題について論じていきたい。

## 一 民俗学における生業研究

河川漁撈の研究は、生業研究の一つの分野を構成するものである。ここでは河川漁撈の研究史を振り返るに先立ち、まず民俗学における生業研究に関して、どのような議論が展開されてきたのか、これまでの生業研究の視座を振り返り、生業研究の課題について考えてみたい。そのうえで、河川漁撈の研究史をたどりながら、今後の研究課題について論じていきたい。

### 1 最上孝敬と生業研究

民俗学において生業研究の視座を最初に総括的に論じたのは最上孝敬である。最上孝敬は『日本民俗学大系』第五卷（一九五九年）の巻頭の論考「はじめに—生業と民俗」のなかで、生業研究の総括をおこなっている。このなかで最上孝敬は、生業を「前代産業の姿」と位置づけ、「現代に残る前代の姿の探求」をめざした。そして生業研究にあたって、「技術」・「労力」・「土地」・「信仰」という四つの枠組みを提示した。

第一の「技術」では、生産や運搬に関して、「人びとの駆使する技法をその使う道具とともにみてゆくことで、その中に進歩発達の状況もみとめられることが少なくない」（最上 一九五九 二二）とする。これは生産技術や運搬技術を道具とともに把握し、その技術史を追究しようとするものであり、技術とその歴史的展開に着目したものであった。

第二の「労力」では、「労力利用」を捉えようとしている。具体的には、家族内での男女別労働、一人が携わる年間の仕事暦、村内専業率といった点に注目している。また養子・奉公・雇用労働のほか、ユイなどの交互労働やモヤイと呼ばれる共同労働など、他家からの労力の取り入れ方など、

「労力組織の規模、態様」にも注目している。最上は、生業を捉えるうえで、労力のかけ方や集め方といった点に注目していたのである。

第三の「土地」は、生業活動の場に関するもの、と言い換えてもよいであろう。具体的には、最上は「土地使用の共同性」に注目する。法制上の所有とは関わりなく、山菜の採取、焼き畑、薪炭材の切り出し、放牧など、土地の共同利用や個人利用をめぐる慣習や利用制限に注目する。そのほか、鶴匠による特権的な漁撈など、河川の利用をめぐる慣習にも触れている。

第四の「信仰」では「その生業をいとなむにあたっての人びとの心意、ことにその仕事と信仰とのからみあい」（最上 一九五九 六）に注目する。具体的には、土地の占有や労働成果の獲得、作業の安全に関する信仰のほか、生業活動の対象や場所などに関する禁忌についても取り上げている。最上はこうした心意・信仰の背景には、「何人でも自由にできるような土地や、その産物でも、神の支配するもので、これを利用するものは、他人からの制約はなくても、神からもらうというける手続きをとる必要があった」（最上 一九五九 七）と述べ、資源利用をめぐる人と神との関係性に注目していた。

最上孝敬の生業研究は、生業を「前代産業の姿」と位置づけ、その歴史的適及に関心を示すものであったため、生業をめぐる近年の議論のなかでは注目を集めることがなかった。しかし、最上が提示した「技術」・「労力」・「土地」・「信仰」という四つの枠組みは、具体的な生業活動を分析していくうえで基本的な視座と言えるものであり、その有効性はあらためて評価されるべきであろう。

## 2 安室知と複合生業論

安室知は従来の単一生業研究からの脱却をめざして「複合生業論」を唱えた。安室知は、「日本において畑作や漁撈や狩猟は単独で生計活動となりえたのか」「安室 一九九二 四一」という問いを出発点とし、生業の複合的なあり方に注目した。安室以前、「生業複合」については、河岡武春による低湿地での稲作と漁撈と鳥獣の複合〔河岡 一九七六〕、辻井善弥による磯漁の村の漁業と畑作の複合〔辻井 一九七七〕、など、いくつかの生業複合についての指摘があった。そうした生業の複合的なあり方に着目し、それを生業研究の方法論として体系化をめざしたのが、安室知の複合生業論であった。

安室知は「生業研究はあくまで『人』の『生』を中心としたものでなくてはならない」との理念を出発点としながら、複合生業論は「個人（または家）を中心にその生計維持方法を明らかにする」ものであり、「従来は別々に論じられてきた生業技術を人が生きていく上でいかに複合させているかに重点を置く」とし、「総合性を志向するものである」とした〔安室 一九九二 四二〕。そのうえで、「生計は各種生業の選択的複合により成り立つという前提」にもとづき、「複合生業論は、生業技術間の関係や社会との関係など、複合の様相がどうあるのかというところまで」、その変遷を含めて明らかにしようとするもので、「その対象は伝統的生業だけでなく商業活動や賃労働なども含む」とした〔安室 二〇〇八 二三五〕。

安室知の複合生業論が、文献史学・地理学・考古学・文化人類学・農学などの分野において注目されるなかで、地理学者の今里悟之は、民俗学の生業研究に対して計量分析の必要性を指摘している〔今里 二〇〇七 二三一〕。安室知は、こうした統計データにもとづく計量分析や、生計復元研

究などを念頭に置きながら、あらためて複合生業論のめざすところについて述べている。すなわち、「複合生業論でもっとも重要な点は聞き取りという手法を用いることにより統計や記録に残らない生業まで掘り起こしたうえで、トータルとして生計活動をみてゆこうとする」〔安室 二〇〇八 二四一〕とところにあった。安室知の主張にもあるように、複合生業論は「統計や記録に残らない生業」をも含めて対象とするものであり、方法としては生計維持活動をトータルに捉えようとするものであった。このように安室知の複合生業論には、生業を「生計維持システム」として捉えようとする視座があったと言える。

## 3 湯川洋司と生業の相互関連

湯川洋司は従来の生業研究を振り返り、新たな生業研究の視点として「相互関連」という視座を提示している。湯川洋司によれば、生業の相互関連という視点には、大きく二つの方向があるとされる。ひとつは、「生業をはじめとする社会の変化の相や要因を具体的に明らかにする」視点である。もうひとつは「地域社会が形成される原理や様態を読み取る」〔湯川 一九九七 二七五〜二七六〕視点である。

ひとつめの視点は、仕事のつながりを見ていくことにより、「地域の生活の変化をきわめて具体的に把握する」〔湯川 一九九七 二七八〕というもので、「その地域社会が他の地域社会とは異なる特色をもつ暮らしの型を成立させることを生業の分野から読み取る見かた」〔湯川 一九九七 二八三〕である。こうした視点の背景には、「地域社会の実体は、生業をベースにして見るならば、さまざまな仕事が成立しそれらが組み合わされて有機的に営まれている」〔湯川 一九九七 二八三〕との捉え方があった。

もうひとつの「地域社会が形成される原理や様態を読み取る」という視点は、宮本常一の「生業の構成」〔宮本 一九七五〕をヒントに導かれたもので、「地域が一つの生産的完結体を構成することに着目したものである。その背景には、「種々の異なる生業が絡み合い生活完結的な地域社会が出来上がっている」〔湯川 一九九七 二八四〕との捉え方があった。なお湯川洋司は、地域内の生業の相互関連だけではなく、地域を越えた遠隔地との結びつきにも注意を払っていた。

このように、湯川洋司の「生業の相互関連」論には、地域社会を生業によるひとつの完結した組織体と見なす視座があり、それは生業をおとした地域研究とも言うべきものであった。

#### 4 野本寛一と生業研究

最上孝敬と並び、民俗学における生業研究の視座や課題を総括的に論じたのは、野本寛一であった。野本寛一は『講座日本の民俗学』第五巻「生業の民俗」において研究史を振り返りつつ、つぎの四点について指摘している。第一点は生業の複合性に関する。水田や用水路などの人工的な水界における漁撈活動から生業の複合性に関する理論化を図った安室知の複合生業論に触れ、今後は「各生業要素を生計維持という視点で人や家単位でたしかめながら総体を把握」する方向を提起する。そして、それは「複合される生業要素個々の時間的位置づけ」のほか、「自然環境・社会環境・経済環境」との関わりも多面的に視野に入れていかなければならないとし、一例として日記・日誌・家計簿などを活用した、家単位の複合生業を記録する「イエの生業誌」を構想する〔野本 一九九七 一一〕。

第二点は生業と環境に関してである。生業のなかでも第一次産業は自然

環境との結びつきが深いとし、自然環境と人とのかわりに注目する必要があるとする。具体的には「環境の規制力」と「環境の変革」に着目し、自然環境と人の相互作用を浮き彫りにできるとする〔野本 一九九七 一三〕。

第三点は「基層民俗」と「上層民俗」に関してである。野本は生業には、技術・民俗・自然環境とのかかわりといった即物的な側面と、儀礼・信仰・呪術・伝説・民謡・芸能といった信仰的・心意的側面があるとし、前者を「基層民俗」、後者を「上層民俗」と呼ぶ。生業研究ではこれら二つの側面を分離するのではなく、立体的に把握することが理想的であると述べ、研究の細分化傾向に警鐘を鳴らす〔野本 一九九七 一三〕。

第四点は「生業の相互関連」に関してである。湯川洋司の「生業の相互関連」論を取り上げ、「地域が一つの生産的完結体を構成する」という指摘に注目し、これに消費生活等にかかわる生活要素を加え、また「イエの内における連鎖」、「イエの外との連鎖」といった視点から見ることににより、生業や生活の全体構造がよりよく見えてくると指摘する〔野本 一九九七 一四〜一五〕。

#### 5 生業研究の課題と「人の生」

ここまで最上・安室・湯川・野本の生業論を取り上げ、どのような視点から生業が論じられてきたのかを見てきた。これら四人の生業論を通して言えることは、生業研究の方向性が生業の複合的・全体的な把握に向かっていることであり、そこには対象とする生業を一つのシステムとして、または一つの体系として捉えようとする視点が認められる。そうした流れのなかで、近年の新たな動向として注目したいのは、マイナー・サブシステ

ンス論である。これはマイナー・サブシステム（副次的な生業）のなかに「楽しみ」という要素が内在することに着目し、生活のなかでの生業の意味を問い直そうとするものである〔松井 一九九八〕。マイナー・サブシステム論の視点に立ち、新潟県山北町の大川で伝承されているサケ漁を分析した菅豊は、「楽しみ」の要素が伝統漁業を維持する原動力として大きな役割を果たしていることを示し、生業の本質として「経済性」や「生産性」のほかに「遊楽性」が存在することを指摘している〔菅 一九九八 二四五〕。

従来の生業研究では、生業活動の実態的研究に力点が置かれ、人間の生活にとつての生業の意味を問うことは、ほとんど行われて来なかった。そうしたなかで登場したマイナー・サブシステム論は、生業に内在する「楽しみ」の要素に注目し、これまでの生業研究のあり方に再考を迫ろうとしていると言える。そのように捉えたとき、安室知が複合生業論を提唱するにあたって、「生業研究はあくまで『人』の『生』を中心としたものでなくてはならない」〔安室 一九九二 四二二〕としたその理念は、生業研究の原点を指摘したものとして重要性を増してくる。

たとえば、近年の生業研究を振り返った小島孝夫は、生業研究の課題として、稼ぐことや遊ぶことだけでなく、「人が生き続けようとする意思の基盤」の解明をあげている〔小島 二〇〇一 三七〕。また石垣悟は、生業が「生計維持と直接的に関係なくとも」、「当事者のアイデンティティを自覚・維持させる要素となりうる」点を取り上げ、文化資源論や文化人類学で議論されている「アイデンティティとしての生業」という視点に注目している〔石垣 二〇一〇 三〇〕。こうした近年の生業研究をめぐる議論は、それぞれに別の方向をめざしているかのようであるが、安室が提示した「人

の生」という枠組みによって再構成していくと、これらをひとつに束ねることができると見えてくると、「人の生」との関わりにおいて生業のあり方を追究することは、今後の生業研究において重要な課題となってくるであろう<sup>1)</sup>。

## 二 戦前・戦後の河川漁撈の研究

河川漁撈を含めた内水面漁撈の研究は、第二次大戦前からはじまり、第二次大戦後は河川環境の悪化により伝統的な漁具・漁法が衰退していくなかで、文化財保護事業の一環として河川漁撈習俗の調査がさかんとなり、伝統的な漁撈具の収集・保存もおこなわれるようになった。以下では、各時代の河川漁撈研究を振り返り、研究対象が漁具・漁法を中心とした漁撈技術から川漁師の心や生活の総体へと移っていく過程を見ていくとともに、近年の研究動向をふまえて、河川漁撈研究の今後の課題について論じていきたい。

### 1 第二次大戦前の河川漁撈の研究

第二次大戦前における河川漁撈を含めた内水面漁撈の研究には、渋沢敬三を中心としたアチックミュージアムによる漁業史の研究と、柳田国男を中心とした民俗語彙による研究成果とがあった。アチックミュージアムの漁業史の研究では、漁村の古文書を対象とした研究のほか、鵜飼・釜・簀などを対象として調査研究がおこなわれていた。

第二次大戦前、渋沢敬三は内水面漁撈に関して、つぎのような問題関心を示していた。すなわち、渋沢敬三は産業としての漁業には「鯨、鮪、鰯

というような規模の大きなものがあるかと思えば、一方には小さい漁業としては、百姓が筌やブツタイのようなもので泥鰌などを獲って居る漁業もある。それは如何にも小さく、まとまって居らぬので下らない漁業のようでありませけれども、日本全体から見ると馬鹿に出来ない。「洪沢 一九五四 四一三」ものがあると指摘している。これは洪沢敬三が、筌やブツタイ<sup>(2)</sup>などを持ちいた農民による「小さい漁業」（内水面漁撈）の重要性に注目していたことを示すものであり、洪沢の問題関心の所在を知ろうと興味深いものがある。

こうした洪沢敬三の問題関心を背景としながら、アチックミュージアムでは筌の研究会が組織された。筌の研究会では六八項目からなる「筌調査要目」が作成され、全国二六一八カ所を対象にアンケート調査が実施され、六〇四カ所から回答が寄せられた（桜田 一九七九 八九一）。その調査の結果は刊行には至らなかったが、それはひとつの漁具を対象とした全国的な調査として、漁具・漁撈研究のうえで先駆的な試みと言えるものであり、第二次大戦後の内水面漁撈の調査研究にも大きな影響を与えるものとなった。

第二次大戦前のアチックミュージアムでの内水面漁撈の研究としては、筌や鵜飼の調査研究のほか、霞ヶ浦・越後三面川・四万十川などでの漁撈調査がおこなわれた（宮本 一九八〇 四一三）。そのなかで戦前、報告書としてまとめられたのは、桜田勝徳による四万十川での漁撈調査であった。桜田勝徳『土佐四万十川の漁業と川舟』（一九三九年）は、中村町や十川川での聞き書きを中心とした四万十川の河川漁撈に関する調査報告である。

限られた日程・条件のもとでの調査であったが、夜間におこなわれる大規模な鮎刺網漁や曳網・投網・釣り・筌・梁・鵜飼など、特色ある漁具・漁

法を中心に四万十川の河川漁撈の実態が、他の地域の漁具・漁法との比較も交えて明らかにされた。そのほか、越後三面川に関しては、伊豆川浅吉による「越後三面川鮭漁業の史的考察」（一九四一年）がある。これは内容としては文献資料にもとづく鮭漁業の歴史的考察であった。

なおアチックミュージアムでの河川漁業史・内水面漁業史に関する研究成果は、日本学士院編『明治前日本漁業技術史』（一九八二年）において、網漁・氷上漁・鵜飼漁・築漁・筌漁・魷漁の漁撈技術史を中心としたものが収録されている。

いっぽう、第二次大戦前における柳田国男を中心とした研究成果としては、柳田国男・倉田一郎『分類漁村語彙』（一九三八年）がある。これは民間に伝わる言葉を指標にして、採集された民間伝承を分野・内容ごとに分類・整理した語彙集である。『分類漁村語彙』では、「船の種類」など三三項目にわたって海の漁業・漁撈に関する民俗語彙が分類・整理されているが、それとは別に「附録」として「内陸漁業」の項目が立てられ、そこに内水面漁撈に関わる漁法・漁具・魚名などに関する一八六の民俗語彙が収録されている。これにより内水面の漁具・漁法の分布や、類似・関連した漁法を一覧することが可能となった意義は大きい。なお海の漁法の項目には、湖沼の漁法との類似点や影響関係にふれた記載もあり、第二次大戦前における柳田国男・倉田一郎による内水面漁撈の研究成果が集約されたものとなっている。

## 2 最上孝敬と内水面漁撈研究

第二次大戦後、河川漁撈を含めた内水面漁撈の調査研究は、印旛沼の漁法を取り上げた篠丸頼彦の報告（一九五九）や、津山市吉井川の漁撈に関

する湯浅照弘の報告(一九六三)など、いくつかの調査報告が認められる。そうしたなかにあつて、一九五〇年代中頃から一九六〇年代中頃にかけて、鵜飼い漁や川潜り漁の調査に精力的に取り組み、多くの調査成果をあげた研究者として最上孝敬が注目される。ここでは最上孝敬の研究成果が集約されている『原始漁法の民俗』(一九六七年)と、西郊民俗談話会での河川漁撈の共同調査を中心に見ていくことにしたい。

最上孝敬の『原始漁法の民俗』は、内水面漁撈やアマの潜水漁の研究成果をまとめたもので、巻頭の「原始漁法について」は総論に位置づけられるものである。そこには最上孝敬の内水面漁撈研究に関する基本的な視座が示されている。最上が「原始漁法」と呼ぶものは、漁法のなかでも古い時代から文献に登場し、しかも近年もおおくおこなわれている漁法をさしており、具体的には河川漁撈では鵜飼やつかみ取り漁であり、海での漁撈も含めると、カナギ漁・ウケ漁・釣り漁・網漁などである。

最上は原始漁法が古い時代からそのままの形で続いていると見ているわけではない。最上によれば、原始漁法は「四囲の情勢の変化進展に伴って、種々と新しい変化を示している。古い姿がどんなものであり、それがどんな事情によってどのように変化し、今日各地にみられるようなさまざまな形に展開したか」「最上 一九六七 三〇を見ようとした。このように、最上には漁法を外的条件との関連で捉え、その展開のあり方を見ようとする視座があつたと言える。

もうひとつ注目すべきは、最上が漁の相互連関に注意を払っていた点である。最上は、鵜飼や裸潜り漁が、カナギ漁・ウケ漁・釣り漁・網漁などと「相互に競合し、ときにははたがいの間に摩擦を生じたりもするが、また場合によってはそれぞれに関して開発された技法をうけついで用いるとい

うような相互援助の関係も生じ、たがいにふかい関連をもっている」(最上 一九六七 四)と指摘し、最上が漁の競合や摩擦、漁法の技術上の相互交流などに注目していたことがわかる。

このように、最上は原始漁法を捉えるうえで、外的要因との関連で漁法の変化・変遷を見たり、漁のあり方や漁法上の技術を他の漁や漁法との相互連関において捉えようとするなど、漁撈技術を中心に独自の視座から内水面漁撈の研究を進めていたのである。

つぎに見ておきたいのは、西郊民俗談話会での河川漁撈の共同調査である。西郊民俗談話会では、『原始漁法の民俗』の刊行直後の一九六七年一月の例会において最上孝敬が「川漁の研究方針」について報告し、そこで議論をもとにして「河漁調査の要点」が作成された。『西郊民俗』第四四号に掲載されたその内容を見ると、調査の要点として、①漁撈技術、②漁場・魚族・漁期、③漁撈従事者の社会的位置や労働組織、④仕事の安全と豊漁に関する信仰や禁忌、といった四部構成となっており、最上が『日本民俗学大系』で示した生業研究の四つの枠組み(技術・労力・土地・信仰)がベースになっていることがわかる。

西郊民俗談話会では、この「河漁調査の要点」にもとづき、会員による漁撈調査が実施され、その調査結果は一九六八年四月の『西郊民俗』第四五号「川漁特集」において掲載された。そこには最上孝敬「東京西郊の河川漁」、小川博「下総行徳で聞いた川漁いくつか」、西村浩一「那珂川の川漁」、河上一雄「川沼における漁法の一断面」、木村博「山女を手掴みにする話」、竹折直吉「東富士山麓における河漁の報告」、坂本正夫「土佐の川漁―ユキドリについて」、小野重朗「川漁点々」、大島建彦「海漁と川漁」の報告があり、関東を中心にしながらも、青森県から鹿児島県にいたる広

範囲の河川漁撈の状況が明らかにされた。西郊民俗談話会メンバーによる「河漁調査」は、共通の指針にもとづいた河川漁撈の一斉調査の試みとして河川漁撈研究史のうえで画期となるものであった。

### 3 文化財調査と河川漁撈研究

河川漁撈を含む内水面漁撈の調査研究は、一九七〇年代以降さかんとなった。とくに一九七〇年代後半以降は、国や道府県による文化財保護事業の一環として、川や湖での伝統的な漁具・漁法や漁撈習俗が文化財調査の対象となり、多くの調査成果が蓄積されていった。

まず一九七〇年代前半を中心に、河川漁撈に関するおもな調査報告をみると、日本常民文化研究所編「多摩川の筥」（一九七〇年）、小林茂「荒川水系の漁撈」（一九七二年）、小林茂「荒川水系の筥」（一九七二年）、亀山慶一「利根川の川漁」（一九七一年）、小野重朗「鰻の石積漁法」（一九七二年）、戸田市教育委員会『戸田市の伝統漁法』（一九七五年）・『戸田市の伝統漁法補付・戸田の漁撈関係語彙集』（一九七六年）、小林茂「荒川水系の筥—形態・構造・分布—」（一九七六年）などがある。これを見ると、当時の河川漁撈の調査研究は、荒川水系をフィールドとするものが中心であり、小林茂がその推進役となっていたことがわかる。

小林茂らによる『戸田市の伝統漁法』（一九七五年）および『戸田市の伝統漁法補付・戸田の漁撈関係語彙集』（一九七六年）は、荒川下流域の本流およびそこに注ぐ河川での専門の川漁師や遊漁者による伝統漁法を対象としたもので、再現可能な漁法については川漁師の協力のもと、漁期も合わせながら往時の姿を再現し、参与観察による調査と写真による記録保存に徹した報告書であった。戸田市の報告書では、荒川下流域の感潮域での

伝統的な漁具・漁法を明らかにするとともに、漁場のなかに「一家の危急を救う」「米櫃」と呼ばれる「とつておきのツボ」の存在を指摘するなど、川漁師の漁場観とも言うべきものにも触れており、従来の河川漁撈の報告書には見られない視座が示されていた。

一九七〇年代前半、河川漁撈の研究が進展するなかで、『日本民俗学』第一一〇号（一九七七年）において淡水漁法に関する特集が組まれた。筆頭論文の最上孝敬「淡水漁法について」は、一九七〇年代中頃までの全国の内水面漁撈の研究成果を総括するもので、そのほか篠丸頼彦「印旛沼手賀沼の漁法」、小野重朗「原始川漁法としてのハジとヒビ」、小島弘義「相模川水系の川漁」、湯浅照弘「岡山県の内水面漁撈習俗—付・県内の二、三の筥—」、泉房子「小丸川水系の伝統漁法」の五つの報告も掲載された。

最上孝敬の「淡水漁法について」は、各地の淡水漁撈の漁具・漁法を個別に取り上げるだけでなく、淡水魚の魚食、流通、漁場の規制、漁獲物の分配、特権的漁業権、信仰との関係など、生業研究の四つの枠組みをふまえながら淡水漁業について論じている。また最上は海面漁業と比較しながら、淡水漁業の特色や淡水漁業を取り巻く環境変化について論じており、河川漁撈を捉えるうえでの基本的な視座が提示された。具体的には、最上は淡水漁業の特色を海面漁業と比較し、「きわめて小規模な漁業」であり、漁撈域が限られており、濫獲防止のため新しい漁法の導入がなされず、淡水漁業には比較的古い漁法が残っている点を指摘した。また淡水漁業を取り巻く状況として、灌漑用の水利用に加えて都市部での飲料水の取水、治水のための護岸工事や砂利採取による魚族の生息環境の改変、電源開発のためのダム建設、工場排水や農薬使用による水質汚染など、河川をめぐるさまざまな環境変化が淡水漁業の衰退・変貌に大きな要因となっているこ

とを指摘した〔最上 一九七七 一三六～一三七〕。

つぎに一九七〇年代後半から一九八〇年代にかけての河川漁撈の調査研究を見ていくと、小島弘義「相模川のアユ漁」(一九七七年)、湯浅照弘「内陸漁業」(一九七七年)、吉川國男「埼玉の潜水つかみ漁(一)・(二)」(一九七七年・一九七八年)、大館勝治・大友務・栗原文蔵「荒川中流域における伝統漁撈法」(一九七七年)、小林茂「荒川水系の鵜飼とその用具」(一九七八年)、平塚市博物館編「相模川の魚と漁―相模川流域漁撈習俗調査報告書」(一九七八年)、奥野広隆「オロ漁―熊本県の原始川漁法―」(一九八〇年)、金内重治郎「最上川下流域のヤツメドウ」(一九八一年)、大塚幹士「最上川水系の鮭漁と用具」(一九八二年)、神野善治「釜漁の研究 上・下―狩野川水系を中心に―」(一九八二年・一九八三年)、広島県立歴史民俗資料館「江の川水系漁撈民俗文化調査報告書 江の川の漁撈」(一九八四年・一九八五年・一九九一年)、安斎忠雄「多摩川水系における川漁の技法と習俗」(一九八五年)、安斎忠雄「多摩川中流域の漁撈具」(一九八五年)、福井県立博物館「九頭竜川の漁撈」(一九八七年)、宅野幸徳「魚類の分布と漁具・漁法の関係―江の川全水域の事例的研究―」(一九八九年)などがある。

河川漁撈の調査研究のフィールドが荒川水系から相模川水系や多摩川水系にとどまることなく、伝統漁法が残る全国各地の水系へと広がり、有形民俗文化財としての漁具の収集を兼ねた漁撈習俗調査が地域の博物館・資料館を中心に展開されていった。そのなかで、『相模川の魚と漁―相模川流域漁撈習俗調査報告書』は、文化庁の補助金により一九七七年度に平塚市教育委員会が主体となって実施された相模川流域の漁撈習俗を対象とした調査報告書である。調査は相模川の上流から河口にかけて河川漁撈従事者

のいる七集落を対象としたもので、漁具・漁法を中心にしながらも、村の生産活動の中での河川漁撈の位置づけ、漁獲物の交易・流通、漁船と船大工、魚の調理法などについて、ダム建設による伝統的な漁具・漁法への影響、新しい漁具・漁法の導入、河川環境の変貌、海の漁法との関係なども対象としており、幅広い視点から河川漁撈を捉えようとしたものであった。

一九八四年に文化庁の補助金により広島県立歴史民俗資料館が主体となって「江の川水系の漁撈民俗文化財調査」が実施され、西日本では初めての大規模な河川漁撈調査の報告書として『江の川の漁撈』が刊行された。江の川水系の河川漁撈調査で注目されるのは、調査対象の転換であった。当初は漁具・漁法を中心に調査が進められたが、「漁具・漁法を生み出し伝えてきた人間の問題なしに漁撈という営みが理解できるのだろうか」(広島県立歴史民俗資料館・江の川水系漁撈文化研究会 二〇〇〇 九)という川に生きる人々からの問題提起をきっかけに、調査対象が「漁具・漁法」から「川漁師の生活の総体」へ向けられることとなったのである。これは河川漁撈研究のあり方を根本から問い直すものであった。

これまで見てきたように、河川漁撈習俗調査では、同一水系内の伝統的な漁具・漁法の記録と漁具の収集が中心におこなわれ、漁具の形態・機能や漁撈技術に注目した用具論的・技術論的な研究に関心が注がれていた。そのため、川漁師の漁撈に対する考え方や捉え方など、漁撈活動の主体である人への関心はあまり注がれることがなかった。そうしたなかで、小林茂の河川漁撈研究においては、漁具・漁法を中心とした物質文化の研究に終始するのではなく、漁場である川に対する捉え方など川漁によって生きてきた人たちの心の内面に目が向けられていた点は注目される。また黒田明憲を中心とする江の川水系漁撈文化研究会においては、調査対象が漁

具・漁法から川漁師の生活の総体に向けられていった。このように、一九七〇年代中頃以降、河川漁撈研究の進展のなかで、川漁によって生きる人たちの「心の内面」や「生活の総体」に対して関心が向けられるようになった。これらは河川漁撈研究にとって新たな一步を刻むものであったと言える。

### 三 近年の河川漁撈の研究動向

一九八三年に四万十川の川漁師・山崎武による『大河のほとりにて』が出版されて以降、各地の川漁師の「語り」や「生の声」を伝える著書が相次いで刊行された。おもなものとしては、利根川中流から下流域の五川・三沼の内水面漁撈を対象とした芦原修二『川魚図志』（一九八四年）、長良川の川漁師を取り上げた天野礼子『萬サと長良川—最後の川—に生きた男』（一九九〇年）、江の川の川漁師・天野勝則による『川漁師の語り アユと江の川』（一九九六年）、仁淀川の川漁師からの聞き取りによる宮崎弥太郎・かくまつとむ『仁淀川漁師秘伝—弥太さん自慢ばなし—』（二〇〇一年）、江の川の川漁師からの聞き書きを中心とした黒田明憲『江の川物語 川漁師聞書』（二〇〇二年）、ドジョウ・ザザ虫・サンショウウオなどの各地の多様な川漁を取材した斎藤邦明『川漁師 神々しき奥義』（二〇〇五年）、四万十川の側に住み、狩猟や川漁をおこなう百姓からの聞き書きをまとめた永澤正好『四万十川Ⅱ 川行き 田辺竹治翁聞書』（二〇〇六年）、長良川の川漁師の語りを綴った大橋亮一・大橋修・磯貝誠司『長良川漁師口伝』（二〇一〇年）などがある。これらの著書には漁撈技術だけではなく、川・魚・自然、そして人生に対する川漁師の世界観に触れるものがあり、従来

の河川漁撈研究が明らかにし得なかった部分を浮かび上がらせたと言える。こうした流れと並行して、一九九〇年以降、民俗学等の研究者によって河川漁撈や川と人との関わりを論じた著書や報告がいくつか刊行された。主要な著書をあげると、樽本龍三郎『川漁の民俗学—兵庫県を中心として—』（一九九〇年）、赤羽正春『越後荒川をめぐる民俗誌—鮭・水神・丸木舟—』（一九九一年）、出口晶子『川辺の環境民俗学—鮭遡上河川・越後荒川の人と自然—』（一九九六年）、野本寛一『人と自然と 四万十川民俗誌』（一九九九年）、矢作川漁協一〇〇年史編集委員会編『環境漁協宣言—矢作川漁協一〇〇年史』（二〇〇三年）、菅豊『川は誰のものか—人と環境の民俗学—』（二〇〇六年）、小林茂『内水面漁撈の民具学』（二〇〇七年）などがある。また文化財調査報告書では、さいたま民俗文化研究所編『利根川の漁撈—中流域の漁法と漁具—』（二〇〇七年）があり、調査報告としては、伊藤廣之『淀川の川漁師からみた自然』（一九九四年）、野本寛一『江の川水系の漁撈民俗—サケ・マスを中心として—』（二〇〇〇年）、伊藤廣之『淀川における川漁師の漁撈活動』（二〇〇九年）、加藤幸治『河川におけるオープンアクセスでの資源利用—紀伊半島南部古座川の漁撈と近代林業から—』（二〇〇九年）などがある。

これらのなかで、まず注目したいのは、赤羽正春『越後荒川をめぐる民俗誌—鮭・水神・丸木舟—』である。赤羽は新潟県の荒川流域での調査にもとづき、荒川のサケ漁と三面川のサケ漁を比較し、流量量などの河況の違いが漁具・漁法のあり方をどのように規定しているのかについて具体的な指摘をおこなっている。従来の河川漁撈研究では、ひとつの水系を対象とし、上流から河口までの漁具・漁法のあり方を、魚類の生息状況や河川環境との関わりから捉えようとするものが主流であった。しかし赤羽の視

点は、異なる水系とのあいだで同一漁法のあり方を比較し、河況による漁具・漁法の違いを分析しようとするものであり、漁具・漁法の研究に新たな視点を提示するものとなった。

出口晶子『川辺の環境民俗学―鮭遡上河川・越後荒川の人と自然―』は、赤羽と同様に新潟県の荒川をフィールドとする研究であるが、その研究の目的は漁具・漁法などの漁撈技術ではなく、川漁師をはじめ川に生きてきた「川人」たちの環境観の解明にあった。出口はサクラマス漁での地先の占有慣行、アユ漁での棹による漁場の占有慣行、サケ漁での地先占有と川への権利意識など、荒川での漁撈活動における川の利用慣行を通して、川漁師をはじめ川に生きてきた「川人」たちの自然とのつきあい方を分析し、彼らのなかに「自然を守る」という環境思想や、「おらが川」への帰属意識が存在することを指摘した。

野本寛一『人と自然と 四万十川民俗誌』は、四万十川の源流部から河口部までの流域を対象に、川をめぐる民俗だけでなく、流域の暮らしや生業を含めて総合的に研究しようとしたもので、他の河川との比較も視野に入れた「河川民俗研究」の試みとも言うべき著作であった。このなかで、河川漁撈に関しては、感潮域におけるチヌ漁やウナギ漁のほか、アカメ・シラスウナギ・ボラ・ゴリなどを対象とした漁撈についても報告されており、これまであまり知られていなかった河口部特有の漁撈のようすが明らかにされた。

矢作川漁協一〇〇年史編集委員会編『環境漁協宣言―矢作川漁協一〇〇年史』は、矢作川の河川環境と内水面漁業の一〇〇年をたどり、流域の人と川の関係の再構築と、河川環境の再生を展望したものである。本書では矢作川漁業協同組合の歩みと環境への取り組みを主軸にしながら、河川環

境の変化のなかでの、兼業漁業者の川漁の姿を描き出している点が注目される。

菅豊『川は誰のものか―人と環境の民俗学―』は、山北町大川での代表的な川利用の活動として、コド・モツカリと呼ばれる誘引装置による伝統的なサケ漁を取り上げ、近世から現代までの川のサケをめぐる共的な管理・利用の制度を歴史的・民俗誌的に描き出し、コモンズとしての川の生成と変容を明らかにしている。河川漁撈研究に関していえば、漁撈活動の対象である資源としてのサケや漁場としての川に着目し、その管理・利用をめぐる制度やルールの側面を中心にしてコモンズ論の視点からの漁撈研究の可能性を示したと言える。

小林茂『内水面漁撈の民具学』は、著者のライフワークのひとつである内水面漁撈の民具学的研究の集大成とも言えるものである。小林茂の研究で注目すべきは、全国に普遍的に分布する筥に焦点を当て、荒川という同一水系内での漁具（筥）の構造・形態・漁法の違いを、流区・河況・魚相との関連で分析し、その連関を明らかにした点にある。もうひとつ注目すべきは、魚や川と向かい合いながら暮らしを立ててきた川漁師の自然観や漁場観といった心の内側を明らかにしようとした点にある。

なお、さいたま民俗文化研究所編『利根川の漁撈―中流域の漁法と漁具―』は、天候、魚種、漁獲量、農事などについて記載した川漁師の日記をもちいて、河川漁撈の具体像や日々の暮らしの一端を描き出すことを試みており、文字資料を活用して川漁師の生活実態を捉えようとした河川漁撈の報告書であったと言える。

以上、一九九〇年以降の河川漁撈の研究動向を振り返り、つぎの三点を指摘することができる。第一点目としては、越後荒川・大川・矢作川・淀

川・古座川・四万十川などで漁撈調査がおこなわれるようになり、河川漁撈研究のフィールドの拡大が進んだ。第二点目としては、川漁師の自然観・漁場観・環境観・生活の総体など、漁撈技術以外の側面において研究の広がりや深まりが見られた。第三点目としては、コモンズ論の導入により、漁場利用や資源管理を包括的に分析することが可能となり、研究方法のうえで深化が見られたと言える。

### まとめ

生業および河川漁撈の研究史を振り返り、明らかにしたこととをまとめると、つぎのようなことが言える。これまでの生業研究は、生業活動の生産性や経済性といった生計維持の側面を中心にしていたため、「人の生」との関わりが研究の対象とされることがなく、生業の意味や意義の追究に関して、あまり関心が払われてこなかった。河川漁撈の研究においても、同様の傾向があった。従来の河川漁撈研究では、漁具・漁法といった漁撈技術を中心にした漁撈活動の実態研究に力が注がれてきた。しかし、小林茂・出口晶子・江の川漁撈文化研究会では、研究が進んでいくなかで、漁撈活動の主体である川漁師の川・魚・自然に対する捉え方や、川漁師の生活の総体を対象とする研究が立ち上がることとなったのである。

現時点での筆者の問題関心に引きつけて言えば、これらの研究は漁撈活動を「人の生」の営みとして捉えようとする研究として位置づけることができる。「人の生」をどのようなものと規定するのかについては、さらなる検討が必要となってくるが、河川漁撈研究をつぎのステップへと進めていくためには、河川漁撈を「人の生」の営みとして捉え、川漁師の生計・生

活・人生などとの関わりを分析していくことが重要な課題となってくる、と言えるであろう。

これらの課題と取り組むためには、どのような視点からのアプローチが有効となるであろうか。そこで筆者が注目したいのは、漁撈活動の主体である川漁師を基点とした三つの関係性である。ここで言う「三つの関係性」とは、川漁師と魚の関わり、川漁師と川の関わり、川漁師と川漁師（あるいは人）の関わりである。こうした「漁撈をめぐる三つの関係性」とも言うべきものを視点としながら、川漁師の生計・生活・人生などのあり方を分析していくことで、「人の生」としての河川漁撈の解明に近づいていくことができるのではないかと考えているが、その点は今後の研究課題としてい。

### 注

(1) 人類学者の田辺繁治は『生』の人類学』において、「生」とは一般的に「生物学的な生命であり、日常の生活であり、また一人一人の特色をもった人生などを意味するが、ここではそれらすべてを含む、『生きていくという事実の総体』」（田辺 二〇一〇 一）と規定している。

(2) ブツタイは『分類漁村語彙』によると、「竹をほぼ長方形の板状に編み、その長い一辺を二つ折りにして太竹などの柄をつけた箕形の漁具」で、「小川などの雑魚類を獲る」ための漁撈具である。ブツタイは各地の漁具の調査報告には散見されるが、現在のところ釜のような詳細な研究は見受けられない。

### 参考文献

赤羽正春 一九九一 『越後荒川をめぐる民俗誌—鮭・水神・丸木舟—』アペック

ス

- 芦原修二 一九八四 『川魚図志』 崙書房  
 アチックミュージ엄編 一九七四 「釜調査要目」『民具マンスリー』六巻五・  
 六号、日本常民文化研究所  
 天野勝則 一九九六 『川漁師の語り アユと江の川』 中国新聞社  
 天野礼子 一九九〇 『萬サと長良川―最後の川―に生きた男―』 筑摩書房  
 安斎忠雄 一九八五 『多摩川水系における川漁の技法と習俗』財団法人とうきゅ  
 う環境浄化財団  
 安斎忠雄 一九八五 『立川民俗シリーズ第五集―多摩川中流域の漁撈具』立川  
 市教育委員会  
 泉房子 一九七七 「小丸川水系の伝統漁法」『日本民俗学』第一一〇号、日本民  
 俗学会  
 石垣悟 二〇一〇 「暮らし(あるいは生き方)を捉える糸口」『日本民俗学』第  
 二六二号、日本民俗学会  
 伊藤廣之 一九九四 「淀川の川漁師からみた自然」鳥越皓之編『試みとしての環  
 境民俗学―琵琶湖のフィールドから』雄山閣出版  
 伊藤廣之 二〇〇九 「淀川における川漁師の漁撈活動」『近畿民俗』第一七七号、  
 近畿民俗学会  
 今里悟之 二〇〇七 「民俗学に『数学』は有害か？」『日本民俗学』第二五二号、  
 二〇〇七年二月、二三二頁  
 大館勝治・大友務・栗原文蔵 一九七七 『荒川中流域における伝統漁撈法』私家  
 版  
 大塚幹士 一九八二 「最上川水系の鮭漁と用具」『民具マンスリー』第一五巻第  
 五号、日本常民文化研究所  
 大橋亮一・大橋修・磯貝誠司 二〇一〇 『長良川漁師口伝』人間社  
 奥野広隆 一九八〇 「オロ漁―熊本県の原始川漁法―」『日本民俗学』第一三一  
 号、日本民俗学会  
 小野重朗 一九七二 「鰻の石積漁法」『鹿兒島民俗』第五四号、鹿兒島民俗学会  
 小野重朗 一九七七 「原始川漁法としてのハジとヒビ」『日本民俗学』第一一〇  
 号、日本民俗学会  
 金内重治郎 一九八一 「最上川下流域のヤツメドウ」『民具研究』第三二号、日  
 本民具学会  
 加藤幸治 二〇〇九 「河川におけるオープンアクセスでの資源利用―紀伊半島南  
 部古座川の漁撈と近代林業から―」『総研大文化科学研究』五、総合研究大学院  
 大学文化科学研究科  
 神野善治 一九八二 「釜漁の研究 上―狩野川水系を中心に―」『沼津市歴史民  
 俗資料館紀要』第六号、沼津市歴史民俗資料館  
 神野善治 一九八三 「釜漁の研究 下―狩野川水系を中心に―」『沼津市歴史民  
 俗資料館紀要』第七号、沼津市歴史民俗資料館  
 龜山慶一 一九七一 「利根川の川漁」『利根川―自然・文化・社会―』弘文堂  
 河岡武春 一九七六 「低湿地文化と民具(一)(二)」『民具マンスリー』九巻三号、  
 四号。  
 黒田明憲 二〇〇二 『江の川物語 川漁師問書』みずのわ出版  
 国立歴史民俗博物館編 二〇〇八 『歴博フォーラム 生業から見る日本史―新し  
 い歴史学の射程―』吉川弘文館  
 小島孝夫 二〇〇一 「複合生業論を超えて」『日本民俗学』第二二七号、日本民  
 俗学会  
 小島弘義 一九七七 「相模川水系の川漁」『日本民俗学』第一一〇号、日本民俗  
 学会  
 小島弘義 一九七七 「相模川のアユ漁」『民具マンスリー』第一〇巻第四号、日  
 本常民文化研究所  
 小林茂 一九七一 「荒川水系の漁撈」『月刊文化財』第九八号、第一法規出版  
 小林茂 一九七一 「荒川水系の釜」『民具マンスリー』四巻九巻、日本常民文化  
 研究所

- 小林茂 一九七六 「荒川水系の筌—形態・構造・分布—」『埼玉の文化財』第一六号、埼玉県文化財保護協会
- 小林茂 一九七八 「荒川水系の鵜飼とその用具」『埼玉県史研究』第二号、埼玉県
- 小林茂 二〇〇七 『内水面漁撈の民具学』言叢社
- さいたま民俗文化研究所編 二〇〇七 『利根川の漁撈—中流域の漁法と漁具—』群馬県佐波郡玉村町五料区
- 斎藤邦明 二〇〇五 『川漁師 神々しき奥義』講談社
- 桜田勝徳 一九五二 『土佐四万十川の漁業と川舟』アチックミュージアム
- 桜田勝徳 一九七九 「敬三とアチックミュージアム」『渋沢敬三』上、渋沢敬三伝記編集発行会
- 篠原徹 一九九五 『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館
- 篠丸頼彦 一九五九 「印旛沼の漁法」『日本民俗学会報』第九号、日本民俗学会
- 篠丸頼彦 一九七七 「印旛沼手賀沼の漁法」『日本民俗学』第一一〇号、日本民俗学会
- 渋沢敬三 一九五四 「所感—昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一回大会にて—」『祭魚洞襍考』岡書院
- 菅豊 一九九八 「深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論—」篠原徹編『現代民俗学の視点第一巻 民俗の技術』朝倉書店
- 菅豊 二〇〇六 『川は誰のものか—人と環境の民俗学—』吉川弘文館
- 宅野幸徳 一九八九 「魚類の分布と漁具・漁法の関係—江の川全水域の事例的研究—」『日本民俗学』第一七八号、日本民俗学会
- 田辺繁治 二〇一〇 『「生」の人類学』岩波書店
- 樽本龍三郎 一九九〇 『川漁の民俗学—兵庫県を中心として—』加古川流域史学会
- 辻井善弥 一九七七 『磯漁の話—一つの漁撈文化史—』北斗書房
- 出口晶子 一九九六 『川辺の環境民俗学—鮭遡上河川・越後荒川の人と自然—』
- 名古屋大学出版会
- 鳥越皓之編 一九九四 『試みとしての環境民俗学—琵琶湖のフィールドから—』雄山閣出版
- 永澤正好 二〇〇六 『四万十川Ⅱ 川行き 田辺竹治翁聞書』法政大学出版局
- 日本常民文化研究所編 一九七〇 「多摩川の筌」『民具マンスリー』三巻四号、日本常民文化研究所
- 野本寛一 一九九七 「総説 生業の民俗」『講座日本の民俗学 第五巻 生業の民俗』雄山閣出版
- 野本寛一 一九九九 『人と自然と 四万十川民俗誌』雄山閣出版
- 野本寛一 二〇〇〇 「江の川水系の漁撈民俗—サケ・マスを中心として—」『民俗文化』第一二二号、近畿大学民俗学研究所
- 平塚市博物館編 一九七八 『相模川の魚と漁—相模川流域漁撈習俗調査報告書』平塚市教育委員会
- 広島県立歴史民俗資料館編 一九八四 『昭和五八年度江の川水系の漁撈民俗文化財調査報告書 江の川の漁撈』広島県立歴史民俗資料館
- 広島県立歴史民俗資料館編 一九八五 『昭和五九年度江の川水系の漁撈民俗文化財調査報告書 江の川の漁撈』広島県立歴史民俗資料館
- 広島県立歴史民俗資料館編 一九九一 『江の川水系の漁撈民俗文化財調査報告書 江の川の漁撈』広島県立歴史民俗資料館
- 広島県立歴史民俗資料館・江の川水系漁撈文化研究会 二〇〇〇 『川に生きる—江の川流域の漁撈用具—』
- 福井県立博物館編 一九八七 『福井県立博物館調査研究報告書 第五号 九頭竜川の漁撈』福井県立博物館
- 松井健 一九九八 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点—民俗の技術—』朝倉書店
- 宮崎弥太郎・かくまつとむ 二〇〇一 『仁淀川漁師秘伝—弥太さん自慢ばなし—』小学館

- 宮本常一 一九七五 「生業の構成」『日本民俗学』一〇〇号、日本民俗学会
- 宮本常一 一九八〇 「解説」『桜田勝徳著作集 第一巻 漁村民俗誌』名著出版
- 最上孝敬 一九五九 「はじめに―生業と民俗」『日本民俗学大系』第五巻、平凡社
- 最上孝敬 一九六七 『原始漁法の民俗』岩崎美術社
- 最上孝敬 一九六八 「河漁調査の要点」『西郊民俗』第四四号、西郊民俗談話会
- 最上孝敬 一九七七 「淡水漁法について」『日本民俗学』第一一〇号、日本民俗学会、のち『生業と民俗』岩崎美術社、一九八三年所収
- 安室知 一九九二 「存在感なき生業研究のこれから―方法としての複合生業論―」『日本民俗学』第一九〇号、日本民俗学会
- 安室知 二〇〇八 「生業の民俗学―複合生業論の試み―」国立歴史民俗博物館編 『歴博フォーラム 生業から見る日本史―新しい歴史学の射程―』吉川弘文館
- 柳田国男・倉田一郎 一九三八 『分類漁村語彙』民間伝承の会
- 矢作川漁協一〇〇年史編集委員会編 二〇〇三 『環境漁協宣言―矢作川漁協一〇〇年史』矢作川漁業協同組合
- 山崎武 一九八三 『大河のほとりにて』私家版、一九八五年に財団法人淡水魚保護協会から刊行、のちに一九九三年に同時代社から『四万十 川漁師ものがたり』として復刊
- 湯浅照弘 一九六三 「川魚漁撈習俗ノート―吉井川上流津山市の漁撈方法―」『岡山民俗』美作民俗特集号、岡山民俗学会
- 湯浅照弘 一九七七 「内陸漁業」『岡山県漁業民俗断片録』海面書房
- 湯浅照弘 一九七七 「岡山県の内水面漁撈習俗―付・県内の二、三の筈―」『日本民俗学』第一一〇号、日本民俗学会
- 湯川洋司 一九九七 「生業の相互関連」『講座日本の民俗学 第五巻 生業の民俗』雄山閣出版
- 吉川國男 一九七七・一九七八 「埼玉の潜水つかみ漁」(一)・(二)『埼玉県立博物館紀要』第三号・第四号、埼玉県立博物館

## Subjects in the study of river fishery — history of the study and subjects for future studies —

ITO Hiroyuki

In this paper, the author first focuses on studies of subsistence activities by Takayoshi Mogami, Satoru Yasumuro, Yoji Yukawa, and Kan'ichi Nomoto, and reviews the history of, and issues inherent in, the study of subsistence activities in folkloristics. Mogami summarized basic viewpoints and presented an overall concept of subsistence activities. Yasumuro advocated a new methodology in this study from the viewpoint of “combination of subsistence activities” (or, combined subsistence activities), which took this study into the next phase. The author points out, however, that this study requires not only the combination of subsistence activities but also studies from various viewpoints.

In terms of the history of the study of river fishery, the author examines the findings of respective studies of river fishery and summarizes the results and issues. The author finds that progress has been made in studies of fishing technologies (e.g., fishing implements, fishing methods) for respective rivers, but matters related to river-fishers (i.e., actors in subsistence activities of river fishery) have hardly been looked at. Thus, the author points out that these issues should be addressed in future studies.